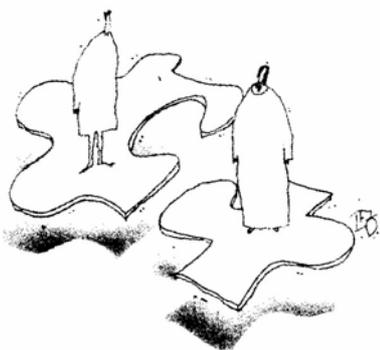


ジグソーパズル

第1編 17章

神の摂理を正しく知れば知るほど私たちは驚くべき益をそこから受けることができる。



私たちが神の摂理に対する確信で武装するならば、たとえどんな災いに出会っても、また自分にとって残念な出来事に遭遇しても、あわてることも怒ることも失望することはありません。良きことに会うなら神に感謝をささげ、悪いことに会うときにはそこから悟るべきことを悟り、悔い改めなければならないことを悔い改めた上で神の愛を信じ、最後まで忍耐できるようにされるのです(詩23:4、7:1、56:4)。

ジグソーパズル遊びをしたことがありますか。一番簡単にパズルを組み合わせる方法はあらかじめ全体の絵を覚えておくことです。そうすれば小さなパズルを自分の手で簡単に組み合わせていくことができます。パズルが大きくなればなるほど、組み合わせるのは容易なことではありません。もし、その絵が100階建てのビルだとしてみましょう。その絵を組み立てる小さなパズルの数は数億個になるかもしれません。あなたはそれを簡単に組み立てることができますか。たぶん困難だと思います。

全世界に起こるすべての出来事をみな計画し、導き、支配しておられる神の摂理を私たちは何を通して説明することができるのでしょうか。今回はそれをジグソーパズルで説明してみることにしましょう。全宇宙とすべての歴史の中で起こる事件、個々の出来事はその一つ一つが神の計画された全体の絵を構成しているパズルの断片のようなものです。もちろん、その全体の絵は神だけが知っておられます。私たち人間は誰もその全体の絵を見たことはありません。ただ、そのパズルの断片として私たちもまたこの絵の一部にされているだけなのです。それならばどうして私たちはその全体の絵をすべて組み合わせるができるのでしょうか。そのような心配は無用です。どうしてでしょうか。神の見えない御手はそのジグソーパズルを組み立ててくださるからです。そこで今回はこの神の組み立て

られるジグソーパズルについて学んでみることにしましょう。

第1節 神の摂理は過去と未来のすべてのことまでも包み込んでいる。

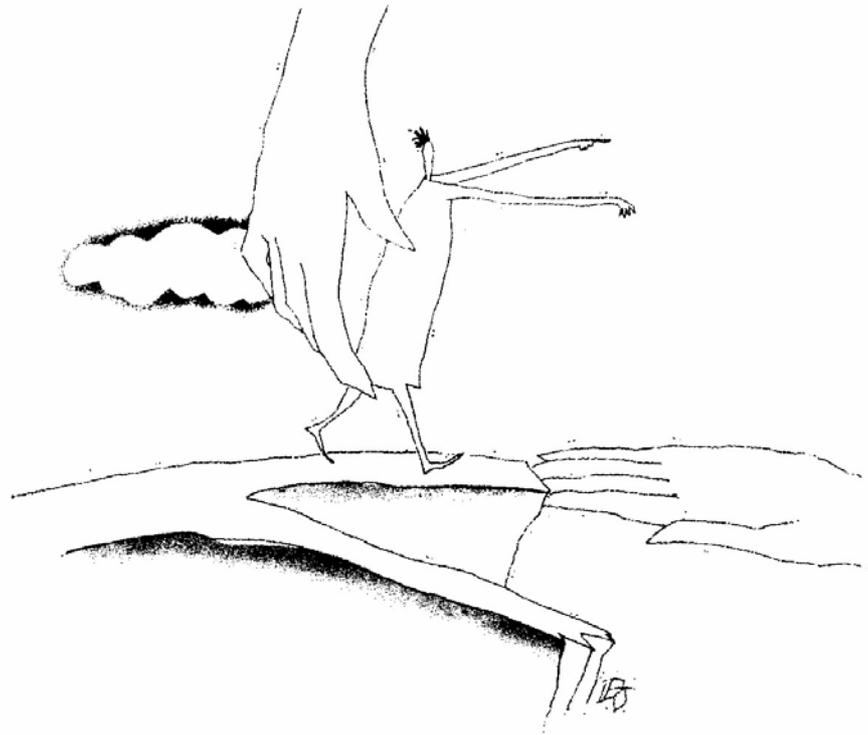
まず、神の摂理を次の三つの要点で整理してみましょう。第一に、神の摂理は過去と現在、未来のすべての事柄を包み込んでおられます。第二に、神の摂理は万物の決定的な原理であり、ときには中間手段（人間）を通して、時には中間手段なしに、またときには中間手段（ある人の思い）と反対に働かれます。そして第三に、神の摂理は特に教会を保護し治めることに大きな関心を持っています。以上の三つの要点だけを十分に理解すれば、私たちは神の摂理についてある程度知っていることになります。

さらにこの三つにもうひとつ付け加えなければならないとしたら。それは世のすべてのことが父なる神の愛と恵み、また神の厳格な義を明確に示しているはずなのですが、ときには出来事のみことの原因が深く隠されているということです。ですからある人々はすべてのことが生まれつき持っている自分の運命に従って起こっているとか、そうでなければ神がボール遊びをするように私たちを操っていると行って愚かな声をあげています。しかし、そのような考えはあまりにもばかげたものでしかありません。私たちの考えはあまりにも小さくて、神の深い御心をすべて理解することができませんが、そうだとでも私たちは神が最善の理由によってすべてのことを計画し、実現されようとしておられることを告白しなければなりません（詩 40:5）。

神の御心に二つあることを理解しなければなりません。そのひとつは律法です。私たちに明らかに示されている神の御心です。無論、律法（福音）も私たちの感覚と理解をはるかに超越する神の御心が込められているのですが、神はそれを識別の霊（イザヤ 11:2）で悟らせてくださるので、私たちにはそれが確実で、明らかな灯火となるのです（詩 119:105、ヨハネ 1:4）。しかし、そのようなには明らかにされない神の御心もあります。宇宙と世界すべてのことを治めておられる隠された神の御心です。「あなたの裁きは大いなる深淵」（詩 36:6；ローマ 11:33、34）。これは私たちの目には隠されている神の御心です。

モーセはこの二つの種類の御心について非常に明瞭で美しい言葉で表現してくれています。「隠されている事柄は、我らの神、主のもとにある。しかし、啓示されたことは、我々と我々の子孫のもとにとこしえに託されており、この律法の言葉をすべて行うことである」（申命記 29:28）。それで私たちはすべてのことを計画し、治めておられる神の秘められた御心を常に謙遜な心で受け入れ、また同時にすでに明らかにされている神の御心（御言葉）に忠実に従っていかなければならないのです。

第2節 神の摂理は私たちの責任を弱めるものではない。



神がすべてのことをなされていると言うならば、人間には責任がないことにならないか？それならば罪を犯してもその責任は神にあることになるのではないか？たくさんの人々がそのように考えます。ホーマー(Homer)の作品に登場するアガメムノン(Agamemnon)が「罪の責任は私にあるのではなくゼウスの神と運命の女神にある」と叫んだように、人々は自分の罪についての責任を神に負わせようとするのです。自分のすべての行動はみな神がそのように定めた運命に従って、そうするようにされるのだと語るのです。そのようになれば殺人者も姦淫を犯す者も盗賊もみな神の御心を遂行する摂理の代行者になってしまいます。すべての罪がみなすばらしいことになるのです。

ここで問題をひとつ出しましょう。道端で犬が一匹死んでいました。幾日か過ぎました。太陽の熱で腐り始め、ひどい悪臭を放つようになりました。それではこの悪臭は太陽から出たものでしょうか？そうでなければ死んだ犬から出たものでしょうか？誰も太陽の光や太陽熱がその悪臭を出しているという人はいないでしょう。生きている犬なら同じ太陽の光や熱を受けてもそのようなにおいを出すことはないでしょう？

人の罪も同じです。人間のすべての行動(罪までも)には神の驚くべき摂理が働いています。しかし、人間から出る腐敗した考え、腐敗した行動は神の摂理から生まれたものではありません。純粹に見てそれは腐敗した人間から出たものなのです。神が私たちに従順であれと要求されているのはただ御言葉に明らかに現された神の御心に対してだけです。

私たちに知らされていないことにも従順であれと語られているわけではありません。罪を犯すことで、神の御心を行っているとは決して言うてはならないのです。

ですから人は神の戒めに記されている通りに「殺すな、姦淫するな、盗むな」という言葉に従うことが大切なのです。それが神の御心を正しく行うことになるのです。もし、その御心に逆らって行動するならば、それは当然罪を犯すことになり、その責任はすべてそれを行った人にだけ求められるのです。しかし、神はそのような人間の悪い思いや行動を用いることで摂理の道具として使われるのです。

前にこれもすでに神の御心だと語りました。私たちの目に隠されている神の御心です。神の御心の隠された部分に属することなのです。神はそのような隠された御心に従って人間が抱いている悪い思いと行動をあらかじめ知っておられ、そのすべてのことをご自身の計画のために用いられ、審判の道具として使われるのです。もしこのような意味で語るなら、罪を犯すことも神の御心に使えることになるといえるでしょう。

第3節 神の摂理を知れば知るほど益を受ける。

考えてみましょう。私たちはなぜ過ぎ去ったことのために怒り、不平を感じているのでしょうか？そのことで損害を受けたと考えているからです。そのことで侮辱を受けたと感じているためですし、抑圧されたと考えているからです。また、なぜ私たちは未来について不安を抱いているのでしょうか？その未来がよく分からないためです。この世界には危険で、悪しきことがあまりにもたくさん存在しています。私たちはほんの5分先のことでもあらかじめ知ることはできません。それはどんなに不安なことでしょうか？しかし、神の摂理をよく知れば知るほど私たちはそのすべての怒りと不安から完全に解放されることができるのです。神の摂理を次のように整理してみることができます。

第一に、この世界に起こるすべてのことはみな神のために起こります。髪の毛一本が落ちることでさえ偶然やなんらかの運命によるものではありません。神がすべてのことの第一原因であられるのです。

第二に、神はすべてのことを合い働かせて、神の子供たちに益となるようにされ、それをよきものとしてくださいます(ローマ 8:28)。そこで神の子供たちは自分に迫るすべてのことがみな自分の祝福となり益となることを信じるようにされるのです。そうでないものはただのひとつも私たちの上に起こることを神は許されることがないからです。

第三に、人間の歴史とすべての自然の事柄を御心通りに取り決められ方は特別に教会を愛される父なる神であられることです。

ですから私たちはどんなことに会っても揺り動かされたりしてはなりません。「あなたの重荷を主にゆだねよ / 主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え / とこしえに動揺しないように計らってください」(詩 55:22、イザヤ 49:15,25)。聖書は神の摂理がどの

ように効果的に計画されているかを十分に証言してくれています（列王上 22:22、12:10、15;サム下 17:7、14;ホセア 2:21、22）。神のそのような摂理を知っていたヨセフは自分の逆境を乗り越えることができましたし、自分を苦しめた人々に柔和と赦しをもって接することができました（創 45:7、8、50:20）。

苦難の代名詞と語ることができるヨブもそのような神の摂理を知っていたためにカルデア人たちに復讐の手を上げることせず、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（ヨブ 1:21）と歌うことができたのです。アブシャロムから逃れて逃亡するときシムイの呪いを受けたダビデも全く同じ目を持っていました。それで彼はシムイの行動に対して「勝手にさせておけ。主の御命令で呪っているのだ」（サム下 16:11）と語ったのです。

ですから私たちが神の摂理に対する確信で武装されているならば、たとえどのような災いに出会い、苦しめられても、あわてたり、心を乱したり、失望することがないのです。よいことを示されれば神に感謝をささげ、悪いことに会ったときは悟るべきことを悟り、悔い改めるべきことを悔い改めた上で神の愛を信じ最後まで忍耐すればよいのです（詩 23:4、7:1、56:4）。

もちろんそれにもかかわらず私たちは神の摂理の道具として使用される第二原因を無視することはありません。たとえをあげれば、私たちがあつよいことに会ったときまず、そのことの原作者であられる神に賛美と感謝をささげますが、また同時にそのことの働き手として用いられた人についても尊敬と感謝する心を持たなければならないでしょう。このことは必ず私たちが私たちを助ける人々がたくさんいても彼らだけを信頼したり、反対にだれも助ける人がいなくても不安になったり、恐れたりしてはならないと言っているのです。

どうでしょうか。この摂理を知って、生きることができること自体が幸福であるといえないでしょうか。もしこのような知識がなければ私たちの一日一日の暮らしはどんなに不安でしかたがないものになってしまうのでしょうか。私たちのまわりにはそのような危険が満ちています。私たちの生活はいつも死と隣り合わせであるともいえるのです。ですから神の摂理を知らないことがもっとも悲惨なことであり、神の摂理を知っていることは最大の幸福といえるのです。

第4節 神の摂理には後悔や中断はない。

聖書に登場するいくつかの表現のために人々が誤解をしています。その中で神が後悔され（創 6:6、サム上 15:11、エレ 18:8）中断される（ヨナ 3:4、10;イザヤ 38:1、5）と表現されているためです。しかし神は人間とは違って途中で御心を変え、後悔されることはありません（サム上 15:29;民 23:19;イザヤ 14:27）。聖書にそのような表現が使われるの

は私たちの水準に合わせるためのものなのです。そのような表現は神の行動に、ある変化があったという意味を表しています。

しかしこの変化も途中で神がみ心を変えられたためではありません。最初から計画された通りに、出来事を変えられたのです。例を上げれば、ヨナはニネベの町の人々に悔い改めを伝えました。そして神は裁きを下そうとしていたことを変えられてその町の人々を許されました。私たちの目にはそれは神が計画を変えられたように見えますが、事実は最初から神はそのようにニネベの町の人々を救おうとされて、そのためにヨナを遣わされたのです（例、創 20:3,7）。

結論

神の摂理を理解するならば私たちの物事を見る目がかわり、考える思考も変わり、感じる心も変化します。神の摂理を知れば、逆境も感謝に、失敗も感謝に、すべてのことに感謝することが出来ます。私たちにはパズルの法則があります。まず神はいつでもどこでも働いておられるということ信じること、次に神は私たち信徒の幸福のために働かれるということ信じること、第三に、私たちはただ神の明らかになった御心（戒め）に従い、一歩もそこから踏み出すことのないようにすること、その通りにするならば組み立てられた神の摂理に私たちも心配することなく、喜んでゆだね、従っていくことができるのです。